「うむ」を考える

米森　寿美男

色々な「うむ」があるものだと思う。色々な経験をさせてもらったなあと感謝感謝の日々である。「生む」というのは女性の特権であり、大変な思いをして新しい生命の誕生がある訳で感動の瞬間である。私のところでは、三人の娘達の誕生を経験させてもらい、妻が苦労をしたからだとあらためて感謝し、本当に頭が下がる思いである。

自分でも新しいことを経験することは何回もあることではないが、「産み」の苦しみを味わうということについて、今回は、孫の誕生、新局舎建設と現在の役職の中で味わった感情を書いてみたいと思う。

一、　嬉しい「生む」との出会い

それは緊迫した帝王切開の手術室から始まり、赤ちゃんが取り上げられ、元気な産声があがるＤＶＤである。最近の産科医院では赤ちゃんの誕生の瞬間を映像で残してくれるようなサービスをしてくれるようである。コロナの影響で立ち会いや面会が制限されている中で、「生む」苦しみと戦って無事に出産するという、実に嬉しいことがあった。それは七月三〇日に二人目の孫が誕生したことである。

三女にかわいい男の子が、緊急帝王切開で無事に誕生した。考えてみると、母親となった三女もまた、同じ病院で、二十数年前の八月一日に帝王切開で生まれていた。その時、私は長女・次女と一緒に出産に立ち会うべく心の準備をして、産婦人科に駆けつけるよう

にしていたが、帝王切開となり、立ち会いは叶わぬ夢に終わった。

今回、娘婿殿も立会い出産を希望し、いつでも病院に駆けつける準備をしていたが、緊急帝王切開となり、叶わぬ夢となったが、三女は長男を無事に生んでくれて感謝・感謝である。予定日が近づいて出産がいつかいつかと待っていたのだが、予定日になっても兆候が無かったので入院となり、その翌朝無事に生まれたのである。現在は我が家ですくすくと育っており、将来の大物感を彷彿とさせている。

二、苦しい「膿む」はいやである

平成六年から入来郵便局長として、入来町に赴任して仕事を開始したが、郵便局は温泉場の中にあり、国道三二八号線から五〇〇ｍも引っ込んでいた。その頃の国道三二八号線は拡張舗装工事が進んでいる真っ最中であった。局舎も老朽化し、狭隘であることから、平成十一年に局舎改善に取り掛かって良いという指示を受け、移転場所を探し始めた。

この頃から入来町は温泉場再開発事業を開始し、都市計画化を進めており、そのために温泉場の道路や区画整理が決まらずに、とても温泉場内に移転場所を見つけることは不可能であった。あれから二〇年以上が経過しているが、道路はまだまだ開通せず、住宅はまばらな状態である。

その頃から、精神的プレッシャーに弱い人間にありがちな持病が出てきて、背中にアテロームが出来て赤く腫れ上がり、寝る時も横向きでなければ寝れないことが続いた。近くの病院で「膿み」を出してもらうのだが、指で押さえるので痛いこと痛いこと「うーうー」という悲鳴が、その度に漏れてしまう。それが半年に一回位の割合で現れては消えていく、

入来郵便局の移転候補地

入来郵便局の新局舎

ひどいときは二～三か月後に発症することを繰り返し、何回も手術をして取り去ろうと思うが、そこが治っても他から出て来るということを繰り返すので、結局応急措置として「膿み」を出してもらうしかなかった。

新局舎の候補地が四か所くらいあり、新しい郵便局の候補地を探す「産み」の苦しみをこの時期に味わうこととなる。最適地は旧入来駅の跡地と考え、入来町との折衝や、議会対策なども行い、あと一歩のところまで来たのであるが、色々と検討した結果、東屋の撤去や公園が無くなることに対する意見などを鑑みて白紙に戻すこととした。

色々な候補地を検討していると「倦む」と思うことが出てきて、諦めてしまおうかとか、自分は恵まれていないのではないかとか、嫌になることの方がたくさんあった。

しかし、多くの方々からの情報提供をいただき、あーでもない、こーでもないと検討していると背中のアテロームがまた腫れてくるということを繰り返して三年が過ぎ、やっと現在の国道三二八号線の旧道沿いの見晴らしの良い場所を確保することが出来て、設計図の製作に取り掛かることができた。そして、平成十五年十一月にやっと完成し、オープンすることができた。苦しい時に助けていただいた方々に感謝・感謝である。

不思議なことに背中のアテロームも郵便局の完成とともに赤く膨れることがなくなり、背中の中で大人しくしているのは不思議である。それでも数年に一回位の割合で出て来るのは仕方のないことである。

三、地区コミュニティ協議会会長の「産み」の苦しみ

薩摩川内市では、四八地区コミュニティ協議会があり、私は入来町の副田地区コミュニ

風船飛ばし

入来武家屋敷群散策

ティ協議会の会長職を令和四年度から図らずも引き受けることとなった。まだまだコロナの影響を受けて各種会議や会合が制限されており、何かを実行するにも密を避けるなどの工夫が必要で、地域の融和や交流を図ることが出来るような環境に無いのが実情である。

それでも何かできることはないか考え、出来ることをやろうと役員と話し合い、通常の行事以外に初めての試みとして、令和四年度は副田小学校創立一五〇周年記念行事を行うこととした。児童や父兄に呼び掛けて一五〇個の風船を何とか飛ばすことができた。世界情勢のお陰で風船も値上がりしていたが、小学校の先生方や地域の方々のご協力のお陰で無事に風船飛ばしが実現した。

今年は、例年行っていた「副田っ子学寮」を違う形にして、副田の子供たちに入来の歴史を感じてもらいたいとの思いから、花水木会で行った第二回まち街歩きを参考にして入来麓武家屋敷群を巡るスタンプラリーを企画した。郷土史研究家の説明を受けながら散策し、希望者は清色城址に登るというものでしたが、六二名の参加があった。保護者からも入来町の生まれでありながら一回も廻ったことがなかったので、大変良かったと好評であった。

人生の終盤を迎え、これからも初めての出来事に出会うことと思うが、後いくつの「産み」の苦しみと出会うことができるのか楽しみでもある。そして、何とか乗り越えて楽しく過ごして行きたいものである。

（元入来郵便局長）